

令和4年(三)第15号関西電力株式会社・高浜原子力発電所1～4号機運転差し止め仮処分命令申し立て事件

債権者 中嶋哲演 田内雄司

債務者 関西電力株式会社

## 準備書面2

令和4年6月27日

福井地方裁判所民事部 御中

債権者 中嶋哲演

債権者 田内雄司

債務者答弁書(令和4年6月27日)に対する反論

1. 福島第一原発事故の時、1号炉の非常用復水器(イソコン)が、550ガルの地震動で壊れていて、満身に機能しませんでした。そのために原子炉の冷却水がなくなりメルトダウンを起こしました。イソコンが働けば大量の蒸気が噴出し、発電所中に轟音を轟かせます。

発電建屋を覆い隠すほどの大量の蒸気が噴出します。

このことは昔、1号炉を立ち上げた運転員のOBが証言しています。

しかし、イソコンが正常に作動すれば轟音を発するという基本的なことを理解していた東電社員は誰もいませんでした。

イソコンは原子炉が緊急停止した時、燃料の崩壊熱で発生する蒸気を、水で冷却して、水に戻し、原子炉に返す働きをします。

そうすることで原子炉の冷却水の損失を防ぎます。

当然、イソコンの冷却水も原子炉の蒸気と同じ熱量を持つ蒸気になります。

大量の蒸気が発生し、排気口(通称豚の鼻)から、勢いよく噴出し、発電所中に鳴り響く轟音を轟かせます。

しかし、あの事故の時、発電所中に鳴り響くジェット機並みの轟音を聞いた人はいません。

1号炉の原子炉建屋を覆い隠すほどの蒸気を見た人もいません。  
イソコンは壊れていて正常に働きませんでした。  
事故後にイソコンの冷却水タンクを調べたところ、160トンの水が、僅か15トン減っただけでした【甲29p1】。  
水は1気圧の下では100度で沸騰して蒸気になります。  
しかし、圧力下では沸点は上昇して水のまま存在します。  
原子炉は約70気圧、280度で運転されていました。  
イソコンが正常に機能しなかったため、原子炉の炉内圧は上昇し、圧力逃し弁が作動しました。  
原子炉の炉内圧が下がり、沸点も下がって、突沸現象が起きて大量の蒸気が発生し、大量の蒸気で炉内の冷却水は押し出され、空焚き状態になり、メルトダウンを起こしました。  
運転責任者はイソコンのスイッチを入れて、蒸気が少量モクモクと出たため、イソコンの冷却水不足と判断して、イソコンを止めました(甲28p60)。  
それから運転マニュアルを読んで、10時間運転可能と知り、運転を再開しました(甲28p63)。  
しかし、その時はメルトダウンを起こしていました。  
自分が運転する非常用設備の運転マニュアルを事故が起きてから読むのです。  
精錬設備の運転責任者を経験した債権者田内は、呆れかえって物も言えません。  
所長以下運転責任者、運転員、柏崎刈羽原発関係者、本社の技術者など、イソコンがジェット機並みの轟音を発することを知っていた人は皆無です。  
東電の無能無責任には呆れるばかりです。  
債権者田内が昔働いた職場であれば、所長も運転員も懲戒免職です。  
それだけではありません。  
彼らは死の危険を顧みず、消防車で原子炉に水を送り続けて、事故の拡大を防ぎ、東日本を救った英雄と称えられています。  
しかし、彼らが決死の覚悟で送った水は12日間、肝心の原子炉に入っていませんでした(甲28p483)。  
途中の枝分かれした配管に抜けていたのです(甲28p469)。  
消防ポンプで送った量と原子炉の貯蔵量との差で気が付きました(甲28p463)。  
配管を変更して初めて原子炉に注水できるようになりました。  
彼らは、自分の職場の配管の配置も働きも知りません。  
恐るべき無責任集団です。  
数々の奇跡に救われて、被害は最小で済みました。  
彼らの無知無責任のせいで、危うく東京も住めなくなるところでした。

使用済み核燃料に火がついていたら、プルトニウムなどに汚染され、日本は住めなくなっていました。

核燃料被覆管の主成分ジルコニウム金属は、高温になると水と反応して酸素を奪い、水素を発生させます。

それほど酸素とは反応しやすいのです。

燃えやすく高温で燃えて、消すことはできません。

使用済み核燃料は燃え尽きるまで燃えて、プルトニウムなどの危険な核種もすべて大気中に放散されます。

全ての原発は放置されて、次々に燃えて、日本中を危険な核種で汚染して住めなくなるところでした。

このような連中に危険な原発を運転する資格はありません。

自分の職務を遂行する知識もないのです。

彼らの無知無責任のせいで、原発事故を拡大し、社会に甚大な被害を与え、東電にも巨大な損失をもたらしました。

懲戒免職で済めば、良い方です。

会社から損害賠償請求を受けるレベルです。

それを、あろうことか、東電は表彰しました(甲 28p279)。

東電の企業文化自体、危険な原発を運転する資格はありません。

**もっと恐ろしいことは、日本中の原子力関係者が、イソコンが正常に働けば、ジェット機並みの轟音を発するという単純な事実を知らなかったことです。**

債権者田内は 2021 年 2 月 21 日発行されたNHK メルトダウン取材班の甲 28「福島第一原発事故の「真実」」を読んで、この事実に気づきました。

NHK はアメリカへ行って、原発の運転指導員に「あの状態でイソコンを止めるようなことは絶対してはいけない。炉内の冷却水が失われる。イソコンが何時間動けば、冷却水はどうなるかは、運転員が当然知っていなければならない」と聞いています(甲 28p352)。

イソコンが働いて、原子炉建屋が蒸気に包まれている写真も載せています(甲 28p301)。

米国原子力発電運転協会・INPOが 2012 年 8 月にまとめた「福島第一原子力発電所における原子力事故から得た教訓」に、「IC(イソコン)に関する詳細な知識の不足が、IC が適切に運転しているか否かの診断を困難にした可能性がある」「何人かの運転員は、(イソコンの)復水タンクに十分な水があり、補給せずに 10 時間程度運転できることを理解していなかった」と指摘されています(甲 28p350)。

昔、1号炉を立ち上げた運転員のOBの「本当にでかい音がします。そして、ぶわーと雲のような蒸気が噴き出す。原子炉建屋が包み込まれてしまうほどの大きさです」を載せています(甲28p323)。

「非常用復水器は、設定始動圧力74.5kg/cm<sup>2</sup>が約15秒間続けば、作動を開始し、原子炉の蓄積熱および崩壊熱を除去する」(甲28p324)。

当初からイソコンは原子炉の圧力を下げるために設けられている別の減圧装置よりも始動圧力が低く設定されていたのである。

「当時、私は原子炉建屋から200メートルほど南の事務所にいましたが、それでもものすごい音を聞きました。例えるとすればジェット機のエンジン音。轟音です。建屋の西側にある細いノズルから、勢いよく蒸気が噴き出すんです。蒸気はぶわーっと雲のように一気に広がる。原子炉建屋全体を包み込んでしまうほどの大きさでした」(甲28P325)。

1961年当時はこの設定であったが、1981年に先ず圧力逃し弁が働き、次にイソコンが働くように設定を変えた(甲28p339)。

2010年7月圧力逃し弁を取り換える機会に、まずイソコンが作動する初期の動作順序に戻した(甲28p340)。

したがって約30年間イソコンは動いたことがなかった。

事故の8か月前に、まずイソコンが作動するように設定を変えています。

日本の各地の1号炉は、アメリカのメーカーと契約して、ターンキイ方式で建設されました。

メーカーは設備を建設し、操業条件を決めて、従業員を教育して、キイを回せば運転できるようにして、日本人に引き渡しました。

それでも最初の日本人は真剣でした。

操業を間違えば、大惨事を招き、自分も死にます。

したがって、どんな事故が起こり得るか？どうやって防ぐか？どうやって収束させるか？いろいろ考えていました。

しかし、操業条件内に安定した運転が続くと、事故のことなど考えなくなります。

東電は「作動するとうるさい」と、イソコンを止めました。

イソコンは作動することなく30年を経過し、「イソコンがまともに働けば、ジェット機並みの轟音を発する」という、簡単な技術も葬り去りました。

東電は30年の運転期間で、むしろ運転技術を危険なまでに劣化させました。

それが今回の事故を起こした真の原因です。

アメリカの一原発作業員が常識として知っていることを、日本の原発関係者は誰一人として知りません。

東電だけでなく、日本の原子力関係者のレベルは、危険なまでに低下していたのです。

原子力安全・保安院の班目委員長が、そのよい例です。

「原子炉は5重の壁で守られているから安全だ」と宣伝に努めました。

2008年アメリカにテロ対策で全電源喪失の危険を指摘されても、「日本では考慮の必要はない」と拒否しました。

事故が起きると菅総理とヘリに乗って福島原発を訪れ「水素爆発の危険」を質問されて、「起こりえない」と答えた直後に、爆発して「アチャー」といったという逸話の持ち主です。

あの事故の時、指揮をとれる人物は、皆無でした。

これだけの情報を与えられ、イソコンの冷却水が僅か15トン減少していたという事実【甲 29p1】を知りながら、イソコンが壊れていたという事実を認識しません。

甲 30「平成 27 年度第 2 回技術委員会 資料 No1-4『1 号機非常用復水器 (IC) の操作に関する回答』p1 を見れば、彼らは「イソコンが働けば、ジェット機並みの轟音が轟く」事実を全く知りません。

「原子炉の蒸気を水で冷やして水に戻せば、その蒸気と同じ熱量を持つ蒸気が発生する」程度のことは、中学生の理科で学びます。

日本の原子力の専門家の知能レベルは中学生以下です。

原子力規制委員会は、東電に柏崎刈羽原発の運転許可を与えました(2017年12月27日)。

債務者答弁書 p41

- (4) そうだとすると、独立性・専門性が確保された原子力規制委員会が、多方面にわたる極めて高度な最新の科学的、専門技術的知見に基づく総合的判断として行ったこのような判断は、原子力発電所の安全性が争点となる民事裁判においても尊重されるべきである。すなわち、原子力規制委員会において福島第一原子力発電所事故を踏まえて制定された新規制基準への適合性が確認されたことは、原子力発電所の安全性が科学的、専門技術的知見を踏まえた総合的判断によって裏付けられたということの意味する極めて重要な事実として考慮され、このような原子力発電所については、具体的危険性がないものとして、その運転が認められるべきである。

『原子力規制委員会は極めて高度な最新の科学的、専門技術的知見に基づく総合的判断として行ったこのような判断は、原子力発電所の安全性が争点となる民事裁判においても尊重されるべきである』

債権者も全く同じ意見です。

しかし、残念なことに、原子力規制委員会は、高度な知識を持った集団ではなく、彼らの知能レベルは、中学生以下です。

日本には、アメリカの一原発作業員が常識として持つ程度の知識を持った専門家はいません。

彼らに危険な原発の運転を任せていたら、日本は住めなくなります。

一日本国民として、原発の即時停止を要求します。